

6. 広報活動

2012年度は、2011年3月の供用開始を受け、2011年度から引き続き、多数の見学や取材に対応した。またシンポジウムの開催や、パンフレットの製作等を通して、SACLAの広報・普及活動につとめた。

1. イベント

広報イベントを主催するとともに、学生や一般向けの展示会やイベントに積極的に参加し、SACLAを紹介した。

1-1 施設公開

2012年4月30日開催の第20回SPring-8施設公開にてSACLAは「想像以上に面白い！～X線自由電子レーザー施設SACLA～」と題し、実験研究棟の実験ホール、光源棟のアンジュレータギャラリーを中心に、SACLAの施設と装置を展示やパネル、機材体験等で紹介した。施設公開全体は過去最多の5,778名の来場があり、うち3,305名がSACLAを見学した。依然としてSACLAへの関心の高さがうかがえた。供用開始以降初めての施設公開であったことなどに加え、2011年度のメディア露出による宣伝効果ではないかと思われる。

1-2 シンポジウム

2012年12月8日に東京・丸の内MY PLAZAホールにて「第2回SACLAシンポジウム」を開催した。施設側からはSACLAの概要を紹介し、SACLAユーザーからは研究成果、ジャーナリストからはSACLAに寄せる期待をそれぞれ語ってもらう、という構成であった。参加者は関東方面からを中心に283名であったが、2回目ということやユーザーによる講演があったこともあってか、SACLA関連のシンポジウム・イベントにこれまで参加したことがある人、民間企業に所属する人の参加が、前回よりも目立った。

演題と講師は以下のとおりである。

講演 理化学研究所 XFEL研究開発部門

矢橋牧名グループディレクター

「SACLAの概要」

講演 東芝 佐野雄二氏

「レーザー照射で金属を強くする－SACLAでメカニズムを解明」

講演 作家・科学ジャーナリスト 本田成親氏

「アマチュアの間から見たSACLAの夢」

表1 2012年度の報道発表一覧

日付	タイトル	発表機関
2012年 6月25日	日本発「コンパクトXFEL」SACLAの有用性、世界が認識 －これからのXFEL施設開発のガイドラインに－	理化学研究所、高輝度光科学研究センターの 共同発表
2012年 7月9日	0.1nmより短波長のX線自由電子レーザー光強度を初めて測定 －国際的な計測基準での測定で標準供給と校正が可能に－	産業技術総合研究所、理化学研究所、高輝度 光科学研究センターの共同発表
2012年 9月20日	XFELの時間幅“1000兆分の1秒”の評価手法を開発 －X線自由電子レーザー(XFEL)を用いた超高速現象研究へ貢献	理化学研究所、高輝度光科学研究センターの 共同発表
2012年 12月17日	世界最強X線レーザービームが誕生 ー原子レベルの精 度を持つ鏡により、1マイクロメートルの集光ビームを実現ー	高輝度光科学研究センター、大阪大学、東京大学、 理化学研究所、科学技術振興機構の共同発表
2013年 2月13日	XFELのパルス幅を1京分の1秒以下に圧縮する手法を考案 ー原子内の電子運動をリアルタイムかつ高精度に計測す る技術開発を目指してー	理化学研究所
2013年 2月15日	X線自由電子レーザー(XFEL)を照射したタンパク質微結 晶中の硫黄原子からの異常シグナルの検出に成功！ ーXFELによるタンパク質分子の構造決定に向けた第一歩ー	東北大学、京都大学、広島大学、理化学研究所、 高輝度光科学研究センターの共同発表
2013年 3月13日	非結晶分子・粒子の構造解析を大幅に効率化する手法を提案 ーX線自由電子レーザー施設SACLAの独創的な利用へー	慶應義塾大学、理化学研究所の共同発表

2. 報道発表・取材対応

2012年度の報道発表は、表1の7件である。

特筆すべきは、供用開始1年目にもかかわらず、利用成果に関する報道発表が複数のユーザーから行われたことである。

SACLAのみを対象とする取材は、直接来所の取材だけで20件近くにのぼった。

3. 刊行物

2011年度に刊行したパンフレット「SACLA-進化する日本の技術」を理研・放射光科学総合研究センターにて増刷した。

4. 見学対応

2011年度から引き続き、政府関係、産業界、海外研究機関等における要人、また学校教育の一環としての生徒・学生の見学をはじめ、幅広い層の見学希望があり、多くの見学者を受け入れた。SPring-8とSACLAの両方にわたるが、2012年度の見学者は、人数、件数とも、2011年度を大きく上回った。

放射光科学研究推進室